
めぐりめぐる鎖

若葉マーク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

めぐりめぐる鎖

【Nコード】

N7333Y

【作者名】

若葉マーク

【あらすじ】

人は縛るのか、縛られるのか。あるいは繋がるのか、繋がれるのか。

陰謀の街の、ある人々と、よそ者の晩夏、あるいは早秋のひととき。
(11月27日、『鎖街』より改題)

車窓を流れる木々のくすんだ暗い緑に目を向け続ける。ただそれだけの、短くはない数時間を、男は静かに消費してきた。

降り立った空港で止めたタクシーは、お世辞にも乗り心地が良いとは言えなかったが、それでもやはり、不平の一つも漏らす事無く黙っていた。

運転手は生来の話好きなのか、あるいは長距離の上客に対するサービスのもりなのか、男に対して、アジア人は珍しいだの、どうしてこの国に来たんだのと男に尋ね、拳げ句の果てに自分の妻が作るスープはこの国で一番だなどと身内自慢を披露してみせたが、男は古びて固くなった革の・おそらくは黒色であったであろう・シートを時折軋ませるだけ。

その様子に、言葉が解らないという事ではなく、ある種の頑なさやなんとなく、そしてようやく感じ取り、運転手はこの客との対話を切り上げた。

この男は一体何を考えているのか。それ以前に、そもそも何をしに来たのか。それを想像する事を、残りの道中の暇潰しにしようと決めてから、どうせ真つすぐな一本道、少し目を切った所でどうと

いうことはない、と既に幾度目かもわからない視線を運転手はバックミラー越しに送る。

しかし、やはり男は、一抱えというには少し足りない、小さめの古びた旅行鞆と共に乗り込んできて、行き先を告げた後、それ以外を捨て去ったかの様に浮かべている表情を崩してはいなかった。

どこか陰鬱な印象を、この国で生まれ育った運転手にさえ与える木々は既に車窓を流れ去り、今やタクシーは丈の短い薄黄色の草々が茂る中に、点々と石造りの小さな家が散在する、なだらかな丘を下っている。

もう目的地は目鼻の先と言えるだろう。この客を早く送り届けて、このなんとも居心地の悪いドライブを終わりにしたい、そんな思いが運転手にアクセルを強めに踏ませる。近頃また燃料代が上がったことはこの際忘れる事にしよう、そう思った矢先、

「・・でいい」

低く、重い音が耳に届いた。

「え？」

数時間ぶりの、どうやら人の声らしい音を聞き逃した運転手が聞き返すと、

「いいでいい」

と、今度ははっきりと声が聞こえた。

「はあ。…しかしお客さん、歩くにはまだ遠いと思いますがね」

踏み続けていたアクセルを緩めながら、しかし男の言葉に完全には沿わずに、緩やかにタクシーを進めながら運転手は続ける。

「荷物はそう無いようだから、歩けないことはないだろうが、せっかくだ、街の入り口まで乗って行っちゃあとうです」

間違いなく居心地は悪いし、とっとと降ろしてしまいたいのは運転手の偽らざるところであつたが、いざ降りと言われてみると、そんな目にこれだけ逢わされてきたのだから、せめて街までの残りの料金をせしめてやりたいという思いが、雨雲が湧くように生じたのだつた。しかし、

「いや、結構」

男の答えはそれまでと同じく、運転手を寄せ付けぬ雰囲気を纏つた、素っ気ないものであつた。

「…そうですか。そう仰っしゃるなら」

運転手は仕方なく、しかしせめてもの抵抗と、停車するのにいい場所を探すフリをしつつタクシーを少しばかり進めた。やがてカメラのシャッターを切った様な機械音が車内で起こると、これぐらいでいいか、と半分満足した様な顔をしながら、タクシーを道の脇に寄せた。

「それではお代を…」

運転手が料金を告げると、男は静かに懷からマネークリップを取

り出し、余計な数十メートルで上乗せされたその額に何も言わずに紙幣を数枚差し出した。

運転手はそれを受け取ると、男に見せつける様にして勘定を始めた。

「ひい、ふう、みい…と、確かに」

運転手は男が支払いに文句を付けなかった事で、もう半分の満足を得た様であった。そして、シフトレバーの隣にあるホルダーに指を無造作に突っ込むと、幾らかの硬貨を拾いあげ、数え始めたが、ふと何かを思いついたような顔をしたあと、申し訳なさそうな声を作って告げた。

「…つと。すみませんね、お客さん。釣り銭がちょうどになりませんで」

声色をやることにはどうにか成功した運転手だが、その表情は、男から更なる満足を引き出そうとする、多少鼻につく卑しさを滲ませていた。が、

「そうですか」

あっさりそう言うと男は、後部席のドアを開け、その右足を路上に落とした。

- いいんですかい？

子供の悪戯じみた自身の企みが成功しかけている事への湿っぽい喜びを、隠そうとしながら隠しきれない声色と表情で運転手は男へ

声を掛けるが、既に男は半分車外へ出かけており、返事はおろか、座り直す事も、振り返ることさえもなかった。

道路に降り立った男は、ドアを閉じると、もうそこには男の他に何も存在しないかのように、街へと向かう道を歩き出す。

運転手といえば、男を乗せていた時には予想しなかった程度の俗な満足感を得ながらも、やはりあの男は何者だろうかという問いが僅かに燦り、しかしその小さな種火を、自身の企みの成功という水でうやむやにして、使い込んで軋むギアを入れ直し、元来た真つすぐに伸びる道を戻ってゆく。

が、消え切らなかった種火が最期の火を燈そうとするのに負け、もう一度バックミラーを覗く。

ついに運転手は、あの男の後ろ姿から、素性や思考に関するいかなる確信も引き出すことが出来ず仕舞いであつた。

やがて男を見る事を止めた運転手は、窓を開けるハンドルを回しながらポケットをまさぐり、客を乗せている間は吸わないようにと言いつけられていたタバコを取り出し、火を点けた。

それを境に、運転手の意識から男への興味がゆるゆると吐き出される煙と共に流れ去っていき、代わりに妻の作る今夜の食事のことが、そこを満たしていった。

街へと向かう道は相変わらず真つすぐに下っている。なだらかで、一筋の脇道も存在しないこの道は、緩やかに、しかし不可避に、何かへの底へと誘われているかのような感覚を大半の通行人に与える。

何かへの、というのは、その何かを、人々が掴みきれない故の印象である。ある者はそれを地の底だと言うかもしれないし、またある者には、それは海の底だと感じられるかもしれない。

はつきりと、これは地獄への道であるとか、もっと端的に、死への道であるなどと表現するものは皆無に近い。大抵の人々は、とにかくよく解らないが、自分が何処かへと下りていくのは感じる。そして、いつか何処かの底へと到るのだという事を運命づけられた様な気持ちを持たされる。

そんな道を、男もやはり下ってゆく。固いアスファルト舗装を施された地面を、男の固い革靴が叩く音は、この道を通る者が聞けば、ほぼ間違いない、この男が何処かへと続く石の階段を降りてゆく様子を想像させる。さらにその中の変わり者には、この男は一体何処へ辿り着くのだろうと、厄介な好奇心を発揮する機会を提供するであらう。

しかし、当の男はというと、別段何かを感じている様子を見せなかった。単に街へと向かつており、その道中が下っている。その程度にしか思っていない、少なくとも、すれ違う者がいればそういった印象を持つであらう、相変わらずの表情で、男は黙々と歩いてゆく。

実のところ、この人々が抱くであろう印象はそう外れてはいない。男はこれから自分に課せられるであろう仕事の為に、周囲の状況を把握、解析こそすれ、その結果へ、感情という色を付けることはしない。そもそもそのための絵筆を持ち合わせているのか、持っているとしても、その描き方を知っているのか、描くつもりがあるのかは、当の男自身にも答えがなかった。

男の目には、灰色の暗い空が変わらない広さで、そして目指す街が小さく、しかしその姿を緩やかに大きくしながら映り続ける。

その街の周りは男と同じく、丈の短い草々に取り囲まれており、さらに奥、街の南には海が滔々と水を湛えている。波は未だ高くない様で、海面には漁民の物であろう、細長いボートらしきものが辛うじて見えるが、空模様と潮のきつくなってきた風を考えると、もついくらかすれば、それらは港に逃げ込んで見えなくなる事は、ほぼ間違いない。

街を取り囲む薄黄色は、恐らくは男が歩くこの道と街中で交差するのであろう、東西に走っている道によって割られている。

しかしその道を走るものはない。視線だけを僅かに左右に振れば、男が下っているなだらかな丘と一続きになっている、しかし峠と呼ばれるには急すぎ、道を通すことは難しいであろう山が、東西に双子のように鎮座している。

街を見守っているのか、はたまた睨みを利かせているのかは、見る者によってまちまちであろうが、どちらにせよ、東の山の頂にある、そう大きくはない灰がかった乳白色の古びた灯台が、その印象

を強くさせる。

道はといえば、その双子の山の麓で、一方は途切れ、もう一方は遮られている。

西の山の麓には、黄色い人工的なシルエットが数種置かれているのが見えるが、動く事はない。麓の一部は他の部分と違って黒みがかつた土が剥き出しになっており、黄色いシルエットの疎らな群れの奥に、麓の一部と同じ色をした小山がある。

東の山には、半円形のトンネルが山から少しばかり飛び出す様に設けられているのが見えるが、その口は、下半分より少し上の辺りまでを、黄色と黒色のストライプ模様が中ほどを横断する、 - - 恐らく二つの、そしてコンクリート製の - - 四角いブロックによつて塞がれている。

半端に手を付けられ既に投げ出されたらしい、これら人間の行いの跡を残すこの街を、この国の人々が見れば、彼ら彼女らの国がそう遠くない昔にぶち当たった、決して良いとは言えない変化の嵐が、この海辺の田舎街をも逃す事なく吹き荒れ、そればかりか、未だ弱くはない風を吹き付け、隙あらば粉みじんにして、あの澱んだ空へと吹き飛ばそうとしている事に、明かりのない暗い夜に一人立たされてる様な、深すぎる灰色をした感情を抱かずにはいられないであらう。

男とて、その「嵐」のことは知っている。

この国の生まれである同僚は、まだ彼が暮らしていた頃のちよつと古きよき時代に想いを馳せつつ、彼の国ではポピュラーな、度数の高い透明な酒を際限なく流し込み、当然の終着点へと到るのが日

課となっているし、ろくに付き合いのないこの男にまで、彼の暮らしていたこの国で一番大きな街が、彼の所属していた軍隊が、いかに素晴らしく、いかに誇り高きものであったかを、その後それらがどんなに悲惨でみすばらしい状況に置かれたかのオマケ付きで、それは感情豊かに怒鳴り聞かせてきたこともある。

しかし、それでも男は、もはやオペラの域に入りそうだったそれを、分別し、篩にかけ、純粹な情報のみを抽出し、取り込んだ。

そして今、その国に立つに到っても、その役目を果たすことなく、もしくは、男自身も知らない場所へ置き忘れられ、いや、そもそも初めからそんなものは存在しなかったのか、そのいずれかなのか、そうですらないのかを知る者は、ただ一人として無いが、結果として、男が自身の絵筆を取ることは、ついになかったのであった。

道の脇を歩き続ける男と出くわすものは殆どなく、それも荷台のコンテナに魚のイラストが描かれたトラックや、大きくも小さくもないタンクローリーが男を追い抜いたぐらいで、街からやって来るものといえば、潮の香りを運ぶ風以外なかった。

タクシーを降りてからそう時間は過ぎていないが、既に日は暮れはじめているであろう。

先程より黒さを増しつつある曇り空は陽を遮り、街とその周りの風景はさほど変わらずにいた。

微妙な所ではあるが、相当急げば雨に降られる前に街に入れるかもしれない。人々がそんな見立てをするであろう所まで歩いてきた男は、しかし歩みを速めることなく、それどころか、あらかじめ予定されていたかの様に立ち止まった。

そして、この道を歩き始めてから初めて、顔の向きを変えた。

その行為で右手の草原の中にぽつんと見えるそれを確認すると、再び歩きですが、その足は硬く冷たい音を立てることはなく、代わりにさくり、さくり、と薄黄色を踏み分ける小気味よい音を鳴らし始めたのであった。

潮風が薄黄色の草原を吹き抜ける音に、さくり、さくり、と男の足元から立つ音が混じる。

緩やかに下る街への道を外れた男の、目にかかる長さの黒髪は、足元の草々と似た動きで、男の視界を幾度か遮った。

下りであることには変わりがないが、道は外れた。不可避であつたどこかの底行きに、立ち止まるか、あるいは元来た道に戻る余地が生まれた様にも思えるが、男の足は相変わらず小気味よい音を立て、下つてゆく事を止めなかった。

男が目指すそれは、今の空模様や丘の上からの風景のせいか、酷く場違いな印象を与える数輪の花 - 向日葵であり、その脇に建てられた、こじんまりとした石の家であつた。

この国の人々はこの花を愛して止まない。それは、この花のかたちが暖かい太陽を思い起こさせるからなのか、あるいは天に向かい伸びやかに育つ姿に、自身の、そしてこの国の未来への希望を重ね合わせているのかは定かではないが、とにかくにも、この花は好まれている。

しかし、この丘には他に向日葵の咲く家はない。その事が、この国にあるこの街を象徴している様に思えるが、男にとってあの向日葵は、この国に降り立つ前に言い含められた目印以上の意味を持たなかった。

やがて男は向日葵の元へと辿り着いた。

家は、男が立つ位置から見える窓はなく、数種の灰色をした石と、その隙間を埋める黒色の土で彩られた壁に、建てられた当時は青色一色であつたであろう、錆が浮き、赤茶色の目立つ斑のトタン屋根、それを突き破っている様にも見える、壁と同じ様な造りの煙突と、道路に面している側の壁に付けられた、白色に塗られた木製と思しき扉で構成されている。

向日葵は、遠目で見ればこの国の人々が愛する姿そのままであつたが、男の位置から見れば、花弁は所々欠け、葉は黄色味の強い緑色をしていて、萎れはじめているのが見て取れる。

男は、そんな向日葵をもう見てはおらず、静かに持っていた旅行鞆を置くと、右のポケットに手を入れ、何かを取り出した。そして掌の長さくらいの細長いそれを、先端を手首に添わせる様に握り隠し、一度だけ逆手に持ち直す。

その確認動作を終えて、扉へと向かう男の足元からは、一切の音が消えていた。

扉は白く、やはり木製であつた。縦長の木板を五枚並べて、それを束ねる形で横木を上下二カ所に釘で打ち付けてある。

扉の中ほど、男から見て右側には、錠前を掛けるためのものと、

取っ手として使ったための、二つの金具が取り付けられていた。

今錠前は掛けられていない。男は扉の脇の壁に寄り添うように、しかし決して触れることなく耳を近づけ、家の中の様子を探る。

気配は - - ある。

人間が奥の方で、いくつかの点と点とを繋ぐように行き来する様子が、土を擦る細切れの音となって伝わって来る。

さらに、泡の弾ける様な音が、こちらは途切れずに耳に届く。

男が、歩いて来た方へ首だけを回し、目をやると、近づいてゆく間にはなかった白いもやが、たゆたう様に浮かんで、流れていた。

それら以外の音はなく、そのいずれにも当たりが付いた。向こうを発つ前に聞かされた通りであつたし、人の気配が一つならば、仮に情報に齟齬があつても、そう後れを取る事はない。

そう判断すると男は、扉の右側を、二度短い間隔で、そして少し間をあけもう一度、都合三度ノックする。

しかし、中の気配は動きを止めたのみで、扉に近づいてくる様子はない。家からは、泡の弾ける様な音だけが聞こえるのみになった。

これで扉が開くなら、男は応対に出た何者かを、速やかに制圧したのである。男は改めて一度、次に三度、最後に二度、決められた通りの回数を、決められた通りのリズムで叩いた。

人の気配が再び生まれ、扉へと近づいてくるのを確かめた男は、

息を殺して数秒を過ごす。そこへ、

「向日葵は好きかね」

としわがれた声が扉越しに掛けられる。それに、

「種は殻付きに限る」

と、似つかわしくない、滑稽ですらある台詞を、相変わらずの表情のまま、相変わらずの声色で男が返す。同時に男は、するり、と扉の左側へ移動し、開くであろう扉の影に身を隠した。

男の予想通りの軌道で、扉がゆっくりと開き始める。が、まだだ。男は右手に握り隠していたそれを、先程確かめた様に持ち直す。

あと二秒、それでこちらから扉の取っ手を引き、体勢を崩させ、制圧する。そう決めた。そして数える。

- - - ……、っ！

数え終わるか終わらないかの間合いで男は、さっと左手を飛ばす。

そして、その手が取っ手を掴もうとした瞬間、

「わたしや - - -」

男の耳に声が届く。

その間延びした声色に、男は取っ手を掴みはしたが、中の何者かを引き倒す機会は逸した。

もはや奇襲にはなり得ない。それに、恐らくその必要もない。何者かが、このあとに続けなければならない台詞を言い切るまで油断はできないが。

そう判断し、扉をゆつくりと男自らの手で開いてゆく。

その様子を感じ取って、何者かは先程の台詞の続きを口にし始める。

扉を開ききり、男がその正面に立つと、そこには――

「バターで煎らにゃあ、どうしたって食べられやしないよ」

酷く腰の曲がった老婆が、笑みを浮かべて佇んでいた。

「おや、聞いていたより渋い顔をしていなさるね」

横から見れば、おそらく「く」の字、あるいは「へー」の字か。

そんな姿勢で首をもたげ見上げてくる、白いものが大分混じった銀色の髪の毛の老婆の言葉に、男は付き合わなかった。

男は、自分の耳が確かだったのか、その答えを得るために、老婆の背後、扉から見える室内に素早く目を走らせている。

南側からは仄かに光が差し込んでおり、室内を申し訳程度に照らしていた。

その明かりによって、朧げに浮かび上がる円いテーブルが見える。木製であろう、やわらかな橙色をしたそれには、白色の小さな壺が一つ。四脚の、背もたれ付きの丸椅子と共に、老婆の真後ろ、部屋の中央に置かれている。

その奥には、石造りの竈。一人が寝そべった程度の幅をもつその上で、男の読み通り、ヤカンが湯気をあげている。さらにその上に、食器を置く棚が設えられ、そこに取り付けられたフックから、フライ返しと、お玉がぶら下がっていた。

男の目につくのはその程度であったが、十分であった。男は自身に関する疑念を完全に払拭するべく問うた。

「……同居人はどちらに」

老婆は、もたげた首を傾げた。

「わたしや独り者だよ」

向こうで聞いてないかい、と続ける老婆の言葉は、男の耳が確かであつたことを証明した。

「まあお入りなさいな、疲れていなさるでしょう。わたしもそろそろ座りたいよ」

腰までの白色のエプロンの紐の結び目辺りをさすりながらそう勧めてくる老婆に、男は背を向け、元来た方へ向かつて歩き出す。男の足元には、小気味よい音が再び戻つて来ていた。

「おや、どこへ……」

行きなさる……男を追つて数歩、外へ出た老婆はそう言葉を繋ぐうとしたが、男がすぐに立ち止まり、屈むと、薄黄色の草々の中から小振りな旅行鞆を拾い上げたのを見て、それを止めた。そして、感心感心、といった様子で、一度、二度と頷き、ひと足先に扉をくぐつていった。

左手で旅行鞆を拾い、再び扉へ向かう男は、再び足音を忍ばせていた。

幾分警戒を解いてはいる。が、たとえ僅かな間であろつとも、一

度家から距離を取ったという事が、男の中で小さく、しかし確かに、鐘を打つのであった。

歩を進める男は、眼前のいかなるものにも意識を集中せず、目に写るもの全てをぼんやりと見ていた。

何か一つに集中すべき状況ではなかった。そうすべき時はまだ先である。ちょうど今のような、すなわち、複数カ所の - 戸口や、家の裏手のような - 火点となり得る場所に備えるべき時には、集中は死角を生みすぎる。

老婆はまだ本当の姿を見せてはいない。シンジケートの上役ではあるが、いや、それすらも含め、今は疑っておく方が賢明な判断と言えた。

男の懸念の一つは杞憂であった。

裏手からの急襲を受けることなく戸口まで戻って来た男は、室内を慎重に伺う。

老婆は - 男に背を向けていた。そして、竈の前でふと振り返る。

「おや、戻ってたのかい。さあ、早くお入りなさいな。今お茶が入りますよ」

笑顔で促す老婆に、相変わらずの表情だけで男は応える。そして、注意深く屋内の左右に目を向けつつ、家へと足を踏み入れた。

男は改めて室内を観察する。左の壁の真ん中よりやや上には、小さな子供が、目一杯体を使って、ちょうど抱えられるぐらいの大きさの、木枠の四角い窓が嵌め込まれ、灰色の空からわずかに与えられる仄かな光を室内に導いている。十字の木で仕切られたガラスの向こうに、もう一つの十字がぼやけて見えた。

どうやら二重に嵌め込まれているらしいこの窓が、この街、この地方、ひいてはこの国の厳冬を思い起こさせる。

表の向日葵も、もう枯れ頃であろう。そしてその後、几帳面にも毎年欠かさずやって来る、逃れ得ぬ風の冷たさを、それを知る者が思い出す時には、決まって無数の刃で身を切り刻まれる様な心地がするのだった。

しかし男といえば、あの窓が火急の際の脱出口たり得るかの見立てをし、破れはするだろうが、男の体格では不適合であるという結論を導くのみであった。

窓から壁に沿って視線を右へ遣ると、壁が折れてすぐの所に、表のものと同じ造りで、しかし色の付けられていない扉、老婆の立つ竈、男の臍の辺りほどの高さの調理台と続く。

調理台の脇には一抱えほどの白く滑らかな質感を持つポリタンクが二つ置かれている。容器の中身が透けて見えるが、中の液体がどれほど残っているかが見て取れるのみで、色はない。側面には、ラベルが何かを剥がしたのであるう、白く薄手の紙が、取り切れないまま残されている。

そして、右の壁際には、光沢のある銀色のパイプで作られたベッ

ド、その脇に、三本の木の棒を真ん中で束ね、両端をそれぞれ広げた形の脚を持つ小さな四角いテーブルが置かれている。

電気は通っていないようで、家電製品の類は見当たらない。ベッド脇のテーブルの上には、吊り下げられるように取っ手のついたランプが、この家の夜の光源を一手に担う事を誇る様に、堂々と立っていた。

全体的に質素な印象のこの家には、この客間と台所、さらに寝室を兼ねた部屋以外なく――扉はあるが――老婆以外の人間が潜んでいるという懸念は薄れている。

しかし、最後の一押し、というものはこの場合欠かせないであろう。

男は、すっかり沸いたヤカンを持って、今は調理台の前にいる老婆の背に声を投げる。

「トイレをお借りします」

そう言いながら既に男は奥の扉へ向かっている。

「ああ、外は冷えるからねえ。どうぞ遠慮せず使っておくれ」

老婆も男の動く気配を察し、それ以上は言葉を重ねない。

老婆が言い終えるのと同時に、男は扉の脇に立ち、一瞬扉の中へと意識を集中する――が、男の耳は扉の奥からいかなる音も拾わなかったし、それ以外の様々な感覚も、この向こうに何者もない事を告げてきた。

それでもなお、男は慎重を期し、未だ右手に隠したそれを、先程と同じ様に握り直す。そして、左手で取っ手を掴み、少しの間をあけ、扉を開いた。

男の感覚に間違いはなく、洗面所は無人であつた。

中へ進むと、客間よりも一層冷え冷えとしている。床の中央に口をあける汲み取り式であらう便器は、よく磨かれて滑らかな陶器の質感がはつきりとわかる。その下、地中に埋め込まれているであらう容器が、家の空気を冷たいものに変え、お節介にもそれをこの小さな個室に還元しているらしかつた。

男の頭上には採光窓がついているが、暗さを増す灰色の空の光は弱く、ある程度馴れなければ用を足すのは難しいであらう。

しかし、その必要に見舞われている訳ではない男には、関係がない。男は便座に腰掛けると、軽く目を閉じ、時間を消費し始めるのであつた。

「お茶が冷めますよ」

しばらくして、扉越しに声を掛けられる。

「今戻ります」

男は目を開き、ふと左の壁に貼り付けられた鏡を見た。

しばらくぶりに、まともに見たその顔に、男は、自分以外の人間

が大抵抱く感想を、同じ様に、しかし感想というよりは観察結果と
いった具合に把握し、何でもなかったように、そこを後にした。

老婆は既に調理台に近い席に腰を下ろし、男を待っている。

「腹が痛むのかい」

老婆は氣遣う言葉を口にするが、顔は男の用心深さに感心し、しかしいささか呆れはじめている様に、わずかに口元だけに笑みを作っている。

そんな老婆の様子を気にかけることもせず、男は老婆の背後を通り、その左手、北側の席を静かに引いた。

窓と玄関の扉を視界におさめる格好で席に着いた男の前に、老婆の右前に置かれたニスを塗られた焦げ茶色の盆から白いティーカップがソーサーに置かれて運ばれた。

「お氣遣いなく」

男が素っ気なく、つぶやく様に言うのを聞いた老婆は、そんな台詞が出てくるとは、この男にしては珍しいと思ったが、すぐにこの違和感の原因に思い至り、

「まあ氣遣ってみたところで、ここにや薬の類は置いていないんだけどねえ」

あつたかくしてるしかないんだよ・・・そう返した老婆は、やはりこの男に社交辞令は似合わないだろうと思った。

老婆は自分の手元にもカップを持つてくると、男との間に二つの小振りで寸胴な、そして一本の中ほどより上が細めに絞られた縦長の瓶を置き、そこに小さな銀のスプーンを添えた。

「砂糖がよければ、そののを使っておくれ」

そう言つて、テーブルの真ん中に置かれた小さな壺を指差すと、老婆自身は小さいが、ずんぐりとした見た目の瓶の一つに手を伸ばす。

「こつちは……ああ違つた」

老婆は手に取つた瓶の、白地に金色で文字の書かれたラベルを読むと、目当ての物でなかった様で、そう独りつぶやいて、瓶を戻すと、もう一方の似た形をした瓶を掴み、ラベルと同じく白色をしたその蓋をひねつた。

「あんたの国のお茶も悪くなかつたけど、わたしにや、やっぱりこつちがいいねえ」

言いながら老婆は、先程添えたスプーンで瓶の中身――粘り気を感じさせるツヤをもつた、橙色の――ジャムを、ひと匙、もうひと匙、とややきつめの紅を湛えたカップに沈めてゆく。

好みの量を入れ終え、老婆は瓶の蓋を閉じる。そしてさらに、ほつそりとした瓶に手を伸ばし、その一段細い首の部分を持つて、その蓋を先程の様にひねり開けた。

そして、透明なその中身を細く、紅い滝壺へとわずかに注ぎ込む。

先程からカップに手をつけず、その様子を見ている男に気付いた老婆は、注ぎ終えた――男の同僚が毎晩、鯨の如くあおっているのと同じ――ウオツカの瓶の蓋を閉め、微笑みながら、瓶を少しだけ掲げてみせた。

「医者には控える様に言われたんだけどねえ。やっぱりこれがなくちゃ」

それに今日は、あんたの門出みたいなものだからねえ、地獄のお迎えも待ってくれるだろうさね――そう付け加えた老婆は、ちょっとした悪戯を楽しむ少女の様な顔をして、ころころと笑った。

室内には、温められたアルコール、そして酸味を帯びた柑橘の香りが、ふくよかな紅茶のそれに包まれて漂う。

「暗くなってきたねえ」

窓からわずかに射していた陽光は、曇り空とはまた別の、日が沈んでゆく暗さが増すにつれ、さらにか細くなっており、室内はもはや夜じみた様相になりつつある。

男が訪れた時から既に、室内は薄暗かったが、ここで暮らす老婆には馴れたものであった。

「さて、火を入れるかね」

男もまた、黒みを増してゆく窓に目を向けていたが、老婆に視線を移した。

老婆はテーブルに両手をつき、肘を伸ばして体を持ち上げ、席を立つ。そして、男の脇を歩いてゆき、ベッドに向かった。

その様子を男は油断なく見ていたが、それを気にせず、老婆は四角いテーブルに置かれたランプを手に取った。

ランプを右手に提げ、老婆は調理台へ向かう。そして、両手の上にちょうど乗るぐらいのマッチ箱を漁り、数本取り出した。

初めの一本はどうやらしけていたようで、二度、三度と擦っても火を点すことはなかった。

老婆はそのマッチを諦め、竈へと放ったが、先程上でヤカンが盛んに湯気をあげていたその放熱口の縁に弾かれ、軽い音を立てた。

地面に落ちたマッチをそのままにして、二本目を擦る。すると今度は火がつき、その火が消えぬ様に左手で囲いながら、老婆は、調理台の上に置いたランプの、腹に付けられた窓を開き、油の染みた芯に火を移した。

火が上手く灯ったかどうかを確かめる老婆の影が土のままの床に伸びる。その影は子供が読む絵本に描かれる魔女のそれと同じで、見る者に恐れを抱かせる。

珍しく、いや、男の様な者たちは須らく、この種の、嗅覚とも呼べるものが優れていなければ、とても生きてはゆけないのだから、当然とも言えるが、男は老婆に、未だ底の見えぬ薄暗さを伴った危うさを感じたのだった。

ランプを提げた老婆が元いた席へ戻る。そのまま右手を伸ばし、テーブルの真ん中、砂糖の壺の辺りへそれを置いたが、男は徐に、老婆と入れ替わりに席を立った。

訝る老婆をよそに、男は、たった今置かれたばかりのランプを左手で持つと、老婆の後ろへ歩いてゆく。

老婆はその様子を、半身を左によじって見ていたが、男がランプを、調理台の右端に置くのを見ても、その思うところは解らなかった。

「眩しかったかい」

それでも、なんとか理由を捻り出そうとした老婆は、その試みの成果――陳腐すぎるくらいはあるが――を、席に戻った男に披露した。

「……いいえ」

しかし、老婆もそうであろう、という事を感じていた様に、男は否定した。

「はて」

老婆はこの寡黙な男の真意を明らかにしたかった。他人の行動の背景を知るとは、老婆、そして男の、そして彼、彼女と同じ様にして生きている者たちの世界では、己の行動を定める物差しであり、それが生き死にを決める事も珍しくはない。

出来れば男に問うことなく達成されるべき事ではあったが、それが叶わなければ、次には速やかに、手段を選ばずその答えを得るべきであり、老婆もそうすべく、とぼけた様な姿を作り、首を傾げた。

「……」

しかし、一向に次の言葉を紡ごうとしない男の口を見ていた老婆は、恐らく彼が自身の身を守るためにしたことだろうと、それ以上の深追いは止めることにした。

裏にある真意を追うことも大事だが、やみくもに藪を突かない事もまた、この薄暗い世界での処世訓であった。

いざとなれば、この男は容赦なく、無慈悲に己が身を守るためだけに行動するであろう。

しかし、その時までには自分は安全でもあるだろうと、出会ってから見てきた男の慎重さの故、その能力に信頼を置きはじめていた老婆は思い直し、ふっと微笑んでから、冷めかけた紅茶を口にした。

その紅茶の温度が、自身もまだ、真意を悟られまいとして隠し事

をしている事を思い出させ、老婆は、嫌な職業病だ、と思った。

先程まで光を取り込み、ランプの明かりを照り返していた南の壁の窓は、今や黒色に染まりつつある外の世界を、うつすらと男に見せるのみとなっていた。

ぬるい、と冷たい、の境に来はじめた紅茶を一口啜ると、老婆はカップをソーサーの上に戻した。

二つの陶器が触れ合ったそれだけが、この室内に響く唯一の音であった。

いれ直そうか、そう思い、男のカップに視線を送るが、老婆の目には、まるで時が止まったかの様に、先程と同じ位置、向きに置かれたカップが写った。

「おや、口に合わなかったかい」

そう尋ねるが、この社交辞令とトンと無縁そうな男は、慌てて取り繕う様に口を付けたりせず、黙っていた。

この段になってもなお、自分を警戒しているのであろうと思った老婆は、内心、そうでなくては困る、と思いながら、少々呆れた様に自身を擬装した。

「はあ。見上げた用心深さだけどねえ」

お茶ぐらい素直に飲んでおくれよ……とつぶやき足すが、やはり男は黙って動かずにいる。

「わたしやスープ作りにや自信があるんだけどねえ、飲んじゃもらえないなら止めておこうかね」

そう言って、紅茶をいれ直そうと席を立つ。そして、ヤカンを手にも、調理台脇のポリタンクに屈み込もうとしたが、それは、男の低い、そして重い声によって遮られた。

「あなたは……」

ん、と老婆は、男に向き直り、珍しく自分に向けて、しかも能動的に発された言葉の続きを聴く姿勢を見せた。

「あなたは……ここでスープを作れない」

……まさか、気付かれているのか。

男の言葉、それ自体はそのことを示してはいない。が、老婆はなんとなく、もう見透かされているであろうと感じた。

内心、ほくそ笑む。そうなくては、そうでなくては、と本部の推薦は間違いでなかった事を喜ぶ老婆であった。が、もう一押ししてみたい、とも思っていた。

ただ間違っていなかっただけでも喜ばしくあるが、もしかすると、

それ以上の、当たり前なのかもしれない。

それを確かめるべく、老婆はこの姿で居続ける選択をした。

「あんまり年寄りを馬鹿にするもんじゃありませんよ。あんたの三倍は生きてるんだ。まあ、若くは見えるだろうがねえ」

老婆は怒りながらも、どこかおどけた様に返す。が、男は相変わらずの調子であった。

「……鍋からスープを飲むつもりはありません」

老婆は、男には似合わない謎がかったその言い回しに、首を傾げた。

右に目を向ければ、竈の上には木の棚が設えられており、お玉がぶら下がった奥に、皿が数枚重ねられている。

白色の、つるり、とした質感を伝えてくるそれらは、流し台がな いとはいえ、使う度に綺麗に洗われているのが見てとれた。

そこまできて老婆は、ああ、そういう事だったか……と、男の目の早さに感心し、また、自身の迂闊さに少々呆れつつ、白旗を揚げる事にした。

「……あんたがお皿を下ろしてくれればいいじゃないのさ」

そう言つと老婆は、ヤカンを調理台の上に戻した。

その、痛々しいほどに折れ曲がっていた「へー」の字は、今や真

っ直ぐに伸びており、席へ戻る老婆の足は、軽快に土を踏み締めるのであった。

「どうやら当たりを引いたようだねえ」

背筋を伸ばし、テーブルに肘をついて指を組み、男を見る老婆の顔半分に、ランプの光が差し掛かり、その笑顔は、深い皺に陰影を付けられた右半分と、そのせいで、より暗さを増したように見える左半分に分けられた。

「合格だよ。……ああそれから」

右手のものはもう必要ないよ――そう付け加えた。

男はしばらく老婆の表情を伺っていたが、やがて右手をテーブルの上に置いた。そしてその手で、冷え切った紅を一口、ゆっくり飲み下す。

先程男の右手が置かれた場所には、黒色に鈍く光る、細長い、先端の尖った――

万年筆が置かれていた。

微笑んでいる。それは先程までと変わりがない。が、もはや擬装を解いた老婆の表情は、その陰影の故か、じわり、じわりと心を飲まれてゆく様な冷たさを帯びていた。

男が自らの武器を、――無論手を伸ばせばすぐに届くが――手放し、自分の出した紅茶を口にしたのを見て老婆は、もういい頃合いだろう、と判断した。

「さて、と。そろそろ仕事の――そうだ、その前に」

そう言っ言葉を切った老婆は、一方は腹積もりを、もう一方は能力を互いに見抜こうと努めていたために、すっかり忘れていた事を済ませようとした。

「わたしの事はオリガと呼んでおくれ」

そう告げるとテーブルに肘をついて、組んでいる指のアーチに顎を乗せ、微笑みは絶やさずに口を閉じる。が、男は口をつぐんだまま、何事も語り出さない。

働かせるには十分に当たりだが、相当に扱いづらい。そんな印象を、老婆――オリガは強くした。

微笑ましさを含んだわずかな呆れに、ほんの少しだけではあるが、辟易が混じりだしたのを感じるオリガは、男の印象とは容易には結び付かないこの儀礼の先を、いつそ促してしまおうかと思った。

名前を知ること、それ自体にはさほど意味がない。むしろ、自ら名乗って回るような――好んで他人と接触する質の――人間を超越される方が、今回の仕事に限ればオリガにとって始末に困る。その点で、今回の人選は正しかった。

だが、目の前の男の場合、その利点が仕事上のコミュニケーションにまで要らぬ影響を与えはしないかという事が、男と、海の向こうの本部――『総本山』、そしてこれから男が赴くあの街を、隠然と支配し続けるスラブ人達――『バスチオン』の三者をつなぐ、いわばハブとして機能しなければならぬオリガにとって、わずかに皮膚を侵し始めた小さな針のような気掛かりになりつつある。

望みは薄そうだが、今後のための試みは必要だろう、とオリガは、男の未だ僅かに開いたに過ぎない警戒心の鉄門を、少しでも押し広げべく微笑みはそのままに、相互理解の儀礼を先に進めようとする。

「で、あんたの――」

「……お好きな様に」

しかしその試みは、平坦な、重い声に割り込まれ、オリガはといえば、男の言葉の意味する所を理解するために、一瞬と呼ぶには長い時間を費やさざるを得なくなったのであった。

「ふつむ……お好きに、ねえ」

オリガはわずかに思案を巡らせる間も男を見ている。その横顔は、自分の背後から照らされているはずなのに、顔立ちがまるで見えなような気分にさせられる表情だった。

「まあ、あんたが いいならそれでもいいかねえ」

このくどさを感じさせるほどの用心深さを持つ――使つ得物も、
うってつけの――男に仕事をさせられるなら、それで良しとしよう。

そう折り合いを付けオリガは、あえて藪かもしれない場所を突く
事はしなかった。

組んでいた指を解き、椅子にもたれながら、両手を頭の後ろで組
み直し、今度は足も組む。上にした右足がテーブルの影から出て、
エプロンの下の長いスカートから、白く、大分細くなった足首が覗
いた。

「ううん、……それじゃあタローってことでいいかね。確かあんた
の国じゃあよく使われるんだろう」

なんとも掴みどころのないこの男なら、これがしつくりくるだろ
う、とオリガは今は遠い過去になった、男の国に住んでいた頃の記
憶を遡り、提案した。

「構いません」

それが私と分かるならば――そう続け、再び紅茶を一口含む男を
見て、もしかしたら、それでも紅茶が好きなかもしれない、そん
な風に、オリガはふと思った。

オリガは姿勢を変えずに、男から視線だけを外した。

ランプの明かりは部屋の隅々までは照らしきれていない。ぼんやりとした闇の中に、壁の折れ目の筋がわずかに浮かんでいるが、それを確かめるには、目を凝らさなければならなかった。

扉の色のせいもあるかもしれない、とオリガは考える。白く塗られた玄関は、薄暗いその辺りでは、いやでも目を引く。

一瞬、暗がりで強い光が突如点滅したかの様に、残像を焼き付けようとする閃きがぱつと浮かぶ――男は、あの筋に似ているのではないか。

が、男へ視線を戻した途端、残像になりかけていたものが、川に落とされた一滴の白いインクのように、定まった形を保てずに流されてゆき、結局、仕事とそれ以外の間、その一線を越えた偶発的な想像は、実を結ばなかった。

やはり仕事の話に専念しよう、オリガはそう思い直して、話を再開しようとする。が、その前に、冷めきった甘い紅茶を一口、音を立てて啜った。

「向こうから預かっているものがあります」

ふう、と息をついた後、オリガが話を切り出す前に、男が声を発した。そして、左脇に置いていた旅行鞆をおもむろに持ち上げ、テーブルの上に置く。

「預かり物？」

オリガには覚えがない。思わず目を鋭く細めてしまっていた。しかし、心当たりを探る間にも、ぱちり、と持ち手の両脇にある留め金を外され、長方形の上半分が開かれてゆく。その様子を見ているオリガの目の高さから、中に納められている品が伺えた。

特に目につくのは、やや毛羽立っている黒い布の巻物であった。それは、ちょうどロールケーキの断面に似た、ゆるい渦を描いている。ただし、その太めの黒い線と線の間には、クリームの代わりに、暗い空間が詰められていた。

ここで、唐突にオリガは鞆から視線を外した。しかし、どこを見てもなく、僅かの時間で鞆へと目を向け直した。その目には、柔らかなさが少しばかり戻っていた。

一番外側の布は、男のいる方向に向かって巻かれ、そのあとロールケーキとは違い、一部が上へ折り返され、角の丸い逆三角形の袋を形作っていて、その口が、男の方に向いている。

丈の長さは、はつきりとしなが、コートの類であろう、と当たりをつけ、オリガは、外の空気がどんどん冷えてゆく様を想い起こして、わずかに身震いした。

もう少し火をくべようか、と思い、右後ろの竈へとわずかに視線を送る。

しかし、男が持参したという物が――実は一つ、ピン、と来た答えを探り当てている――何なのか知ることの方を優先し、ぐつ、と上半身をテーブルの上へ乗り出し、足を組み替えるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7333y/>

めぐりめぐる鎖

2011年11月30日22時46分発行